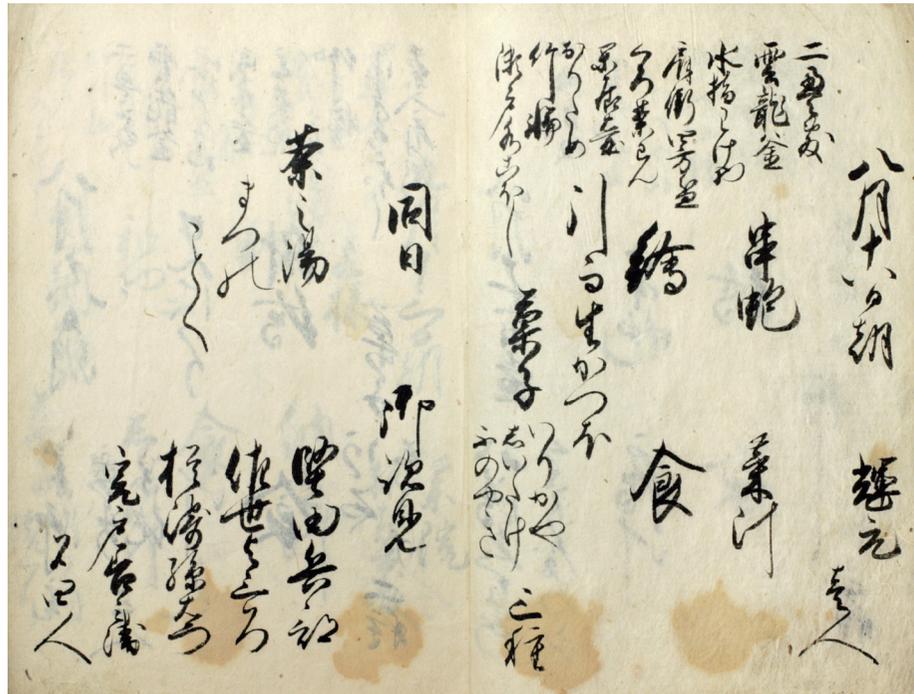


茶の湯



* 毛利家文庫 16叢書94「利休茶湯控」

解説

鎌倉時代に中国から入ってきた喫茶の習慣は、茶の湯の流行を生み、織田信長や豊臣秀吉に仕えた千利休（1521～91）によって、質素なわび茶の作法が完成されました。

大名や大商人たちにとって、茶会を催し、高価な茶器を所有することは一種のステータス・シンボルともなりました。秀吉が利休とともに1587（天正15）年に京都北野で催した北野大茶湯は、茶の湯に関心をもつ者に貴賤・貧富の差なく参加を呼びかけ、公家や茶人が設けた茶屋は1,600にもものぼったといわれています。

写真は、1590（天正18）年8月から翌年閏1月にかけて千利休が催した茶会の記録です。茶会が催された日付、参会者、茶室、利休愛用の茶壺（橋立・閑居・備前壺）等の記載があり、懐石献立や菓子が詳細に記されています。一般には「利休百会記」（りきゅうひゃっかいぎ）という名で知られ、利休茶の湯研究の重要文献として評価されています。

山口県に関わりの深い人物としては、毛利輝元とその家臣（8月18日、9月21日、同22日、1月15日、閏1月11日）、小早川隆景（9月21日）、吉川広家（9月21日）などの名がみえます。毛利輝元は、当時小田原の北条氏を攻めに出陣した秀吉の留守を守って京都にいました。

* 「利休百会記」は、『茶道古典全集6』（淡交社、1977年）で活字になっています。

* 当館には、毛利輝元が息子の秀就のもとへ利休の茶杓を届けた手紙もあります（毛利家文庫 4毛利家25（16））。